

日本語と中国語の「断り」表現から見る ポライトネス・ストラテジーの使用実態

呂鵬

東京学芸大学大学院教育学研究科

ceci8580@gmail.com

1. はじめに

日常生活の中で、次のような会話を耳にしたことがある。たとえば、

例①（美容室受付の場面）

A: 今日の午後3時予約できますか? B: 申し訳ございません、今日予約もういっぱいなので。

例②（友達からお金を借りる場面）

A: ゆりちゃん、1万円貸してくれる? B: 今持ってないから。

例③（友達に誘われた場面）

A: 今日一緒に飲みに行こう。 B: ごめん、今日ちょっと忙しくて。

以上の例では、話者Bの意図としては相手を断ろうとしていることである。日本語ではよく「の」「から」「て」のような原因・理由節の「言い終わり」の表現を用いて、婉曲に相手を断る傾向がある。もし「の」「から」「て」が付いていない場合、聞き手が相手にきつく断られたと聞こえるだろう。「の」「から」「て」を使うことにより、相手に表現がより柔らかく聞こえる、または丁寧に聞こえると思われる。

日頃、円滑な人間関係をスムーズにコミュニケーションを進めていくために、ポライトネス・ストラテジーが多く用いられていると考えられる。以上のような「から」「の」「て」による「言い終わり」の日本語表現はポライトネス・ストラテジーの一つとも言えよう。本研究では、日中両言語の会話における「断り」表現に着目し、これらをポライトネス・ストラテジーとの接点から分析したいと思う。

2. 先行研究

中島（2012）、[田中訳 2011]ポライトネス理論では、フェイスをポライトネスの中心概念と考えられている。フェイスとは、社会の成員であればだれでももつ社会的自己像で、コミュニケーションの場において、お互いに協力してフェイスを維持しようとするのであると想定する、円滑な人間関係を維持するためには、お互いに相手のフェイスを脅かすような行為 FTA（face threatening act）を避けようとする。

FTA（フェイスを侵害する行為）の度合いに応じる措置として、以下のポライトネス・ストラ

テジーが選ばれる。

「1」フェイス侵害を軽減する措置を取らずあからさまに言う。「2」ポジティブ・フェイスに配慮した言い方をする。「3」ネガティブ・フェイスに配慮した言い方をする。「4」言外にはのめかす。「5」フェイスを脅かす言語行動を起こさない。

3. 研究方法

- ・日中両言語のドラマの中で、「断り」の場面の会話データを収集する。
- ・ポライトネスに関する先行研究を参照し、収集した「断り」表現を分析する。

4. ドラマから見る日中両言語の「断り」表現

今回日中両言語の断り表現はそれぞれ50例を収集した。中国語の断り表現は「咱们结婚吧」「重案六組1, 2」というドラマから収集した。日本語の断り表現は「HERO2」「半沢直樹」「相棒1～8」三つのドラマから収集した。施(2005)の「断り談話」の構成要素の分類法を参照し、今回集めた「断り」表現を分類した。分類した結果中国語において「理由説明+直接的断り」表現が一番多かった。日本語においては、「直接的断り」表現が一番多かった。

5. 断り表現から見るポライトネス・ストラテジー

山岡(2011)では、依頼がなされた場合、依頼を受けた側はそれを引き受けないと依頼者をはっきりさせ、嫌われてしまうのではないかと述べられている。したがって、相手の「積極的フェイス」(他者によく思われたい、好かれたいという欲求)を脅かす恐れがある。

したがって、断りという行為は誘う側や依頼側のポジティブ・フェイスを脅かす恐れがある。

5.1 フェイス侵害を軽減する措置を取らずあからさまに言う

Brown and Levinson(1987)[田中訳 2011]あからさまに言うストラテジーは重大な緊急事態や、話者が必死になっているような場合に使われる。なぜなら、緩和行為は伝えられる緊急性を損なうことになるから。

今回収集した「断り」表現の中で警察と容疑者の会話が多かったため、警察から依頼された時、容疑者は自分の罪がばれないよう、そのような緊急事態の下で直接的断りのデータが多かった。そのため、フェイス侵害を軽減する措置を取らずあからさまに言うというポライトネス・ストラテジーが「直接的な断り」表現に多く見られた。

例：1 杉下：任意で調べさせていただいていいでしょうか？ 容疑者：結構です。(相棒)

2 嫌疑人：我说了，你们可以宽大处理我吗？ 曾克强：不能。(重案六組1)

(訳) 容疑者：私は(事件のこと)を言ったら、私に処分を軽くしてもらえますか？

曾克强：できない。

5.2 ポジティブ・ポライトネス

滝浦(2008)によれば、ポジティブ・フェイス、すなわち“他者に受け入れられたい・よく思

われたい”という他者評価の欲求を顧慮するストラテジーが、ポジティブ・ポライトネスである。

Brown and Levinson(1987) [田中訳 2011] ポジティブ・ポライトネスは、不同意をあからさまにしたくないような社交的なやりとりの場面で「罪のない嘘」を生み出す。Hのポジティブ・フェイスを傷つけるよりはむしろ「嘘」をつくという場合がそれであると指摘した。

例3 案件相关人：过一会儿，你们都留下来吃饭。

季洁：喔，谢谢，我们还有任务。（重案六组1）

（訳）事件関係者：のちほど、あなた達残って、一緒にごはんを食べましょう。

警察：あ、ありがとう、私達まだ仕事がある。

事件関係者がごはんを誘うという行為は警察との距離を縮小したい、好かれないというポジティブ・フェイス欲求が持っている。この会話の場面は警察と事件関係者は親しくないため、ごはんをおごってくれるという好意は警察が接受できない。事件関係者のポジティブ・フェイスを傷つけないよう、まだ仕事があるという嘘の理由を述べて、相手を断る。このような相手のポジティブ・フェイスに配慮した断り方は一つのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーだと考えられる。

また、先行研究では主に会話の中で聞き手のフェイスを配慮する立場から論じていた。しかし、話し手の発話は話し手自身のポジティブ・フェイスやネガティブ・フェイスに配慮した言い方にもなるかもしれない。例えば、警察：あ、ありがとう、私達まだ仕事がある。この例では、話し手（警察）自身がこの言い方すると、事件関係者に良く思われたい、理解されたいというポジティブ・フェイス欲求も持っていると考えられる。したがって、この言い方はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると考えられる。

Brown and Levinson(1987) [田中訳 2011]ネガティブ・ポライトネスは、相手の「ネガティブ・フェイス」、つまり、自由な行動や興味を邪魔されたくないという欲求に向けられる補償的行為である。また、FTAを行うことに対して謝罪をすることによってSはHのネガティブ・フェイスを侵害することを望んでいないことを伝え、それによって、その侵害を部分的に埋め合わせることができる。

先行研究では謝罪表現は一つのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとされている。しかし、今回収集したデータの中で、謝罪表現は必ずネガティブ・ポライトネス・ストラテジーではないことを発見した。場合によって、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーにも表れている。

例4 被害者の母：話はそれだけだったら、ちょっと飲んででよ。

杉下：すみません、勤務中なので。（相棒）

この「断り」表現の中で、理由説明と「すみません」という謝罪表現を使った。この場面では杉下に積極的にお茶を入れるという行為は被害者の母が杉下さんに好かれない、良く思われたいというポジティブ・フェイス欲求を持っている。杉下は謝罪表現を使って、相手の好意に備えない

という結果を伝える。謝罪は自分のフェイスを損なうため、この場面では杉下は自分のフェイスを犠牲にし、相手のフェイスを優先して配慮することは、相手のポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと考えられる。

5.3 ほのめかし

滝浦（2008）では、事柄を明示的に伝達することよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して、用件への直接的な言及を回避するストラテジーが、「ほのめかし」のストラテジーである。Brown and Levinson(1987) [田中訳 2011]では、ほのめかしのストラテジー15「最後まで言うな、省略する」が挙げられる。あるいは、言いさしでやめるという言い方はほのめかし・ストラテジーの一つとされている。

文の頭に戻る、その三つの例は原因・理由節による「言い終わり」の表現を用いて、婉曲に相手を断る。そのような断り表現は依頼側や誘い側に対して直接的に断らず、理由を述べ、相手のフェイス侵害を避け、潜在的相手を断っているという働きかけがあると考えられる。そのような断り表現は日中両言語にも発見された。

例5 田村：どう、終わったら、飲みに行かない？ 久利生：今日ちょっと仕事があつて。(HER02)

6 被害者：我出十倍的价钱，帮我查查，他现在在干嘛。

季洁：我们不是私人侦探。（重案六组2）

(訳) 被害者：(給料) 十倍以上のお金を払うから、彼はどこで何をしているのか調べてくれる？

警察：私達は探偵じゃない。

このような直接的に断らず、理由を述べるだけ、相手のフェイス侵害を回避する断り表現は、ほのめかしストラテジーの一つである。

6. 終わりに

今回収集した「断り」表現は三つのポライトネス・ストラテジーから分析した。その中の謝罪表現については先行研究では、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つとされている。しかし、謝罪表現は文化や場面によって、必ずしもネガティブ・ポライトネスではないと分かった。また、先行研究では、主に話し手が聞き手のフェイスに配慮した点から論じていた。実例を分析すると、特に、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーについては聞き手のポジティブ・フェイスに配慮した言い方と同時に自分のポジティブ・フェイスにも配慮している。今後は、それについてさらに分析して行きたいと思う。

参考文献

1. 施信余 (2005) 『談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人大学生と台湾人大学生との比較』東京外国語大学大学院 地域文化研究科
2. 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
3. 田中典子 (訳) (2011) 『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』研究社
4. 中島信夫 (2012) 『語用論』朝倉書店
5. 山岡政紀、牧原功、小野正樹 (2011) 『コミュニケーション配慮表現』明治書院